キズナエピソード

丘田マリアンヌ　2話

//ADV形式開始

//自室

［とびお］

俺は、スマホに登録された一つのアドレスを見ながら

腕を組んでいた。

//暗転

//漫研のブース

［りり］

「とびおとマリ夫って気が合うんじゃない？

意見交換とかバンバンしちゃえば？

とびおのアドレス教えて。これ、マリ夫のアドレスね」

［とびお］

漫研のブースから出ていく際、りりのおせっかいで、

俺はマリアンヌと半ば強引に連絡先を

交換させられることとなった。

［りり］

「じゃ、連絡よろー！

言っとくけどさ、こういうのは男の子の方から

送るのがマナーだからね～？」

[りり]

「ん？　何してんの？

ほら、マリ夫からも伝えないと」

［マリ夫］

「え、えぇ!?

え、えっと、僕は、その……」

［とびお］

やり取りは終始りりがリードしていく形。

一方のマリアンヌは、りりの後ろに隠れるようにして

恥ずかしそうにもじもじしているだけだ。

［とびお］

だけど、りりの後ろでちらちらと様子を伺う顔は、

困惑だけでなく、何かを期待しているような、

そんな表情にも思えた。

うつむき加減で、こちらの様子を伺うような大きな瞳。

耳まで真っ赤に染めた白い肌。

あの瞬間、俺は完全に心奪われてしまっていた。

//暗転

//自室

［とびお］

「連絡してみるかな……？

男の方から送るのがマナーだって言われたし……」

[とびお]

マリアンヌが描いた漫画は、不思議な魅力があった。

独特の世界観や台詞回し、物語の構成。

好みとかそういう次元を超越して、全てが心に染み渡った。

［とびお］

「せめて、あの漫画の感想だけでも伝えておかなきゃな……」

//背景：黒

//（メールでのやり取り、というてい。

//　ここでADV形式を使わないと、ビジュノベ形式メインで終わってしまうので……）

［とびお］

『こないだはどうも』

［マリアンヌ］

『こ、こんにちは！

とびおさん、ですよね』

［とびお］

『はい。今、大丈夫？』

［マリアンヌ］

『だ、大丈夫っス！

僕なんかのためにわざわざ……恐縮っス』

［とびお］

どうやら、マリアンヌはメールが来るとは

思っていなかったらしい。

返ってくる文面からは、驚きと嬉しさがにじみ出ている。

［とびお］

『恐縮しなくてもいいって！

あの漫画、ほんとに感動したんだから。すごかったよ！

普段からああいう漫画を描いてるの？』

［マリアンヌ］

『そうっス。

実は今も次のイベントに向けて、

新作を描いてる最中でして……』

［とびお］

『そうなの!?

ごめん、忙しいとこ邪魔しちゃったかな？』

［マリアンヌ］

『いえいえいえ。お世辞でも、

あの作品を褒めてくれる人がいると思うと

なんか嬉しくて、モチベが上がるっス！』

［とびお］

『感動したのは本当だよ。えっと……

今描いてる新作も、完成したらぜひ読みたいな』

［マリアンヌ］

『え、えぇ～!?

いや、でも、まだ完成してませんから……

それに、締め切りもかなりギリギリな状態に……』

［とびお］

『大変そうだな。　あ、そうだ！

漫画ってアシスタントっているんじゃないの？

よかったら俺、手伝おうか？』

［マリアンヌ］

『そんな！　迷惑はかけられないっスよ』

［とびお］

『迷惑なんかじゃないって。

それに、漫画の原稿がどうやって出来上がってくのか、

興味あるしね』

［マリアンヌ］

『そ、そうっスか？

ならば、お願いしようかな……』

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

そのやり取りがきっかけで、

俺はその時以降もマリアンヌの創作活動の

お手伝いをするようになった。

ある時は原稿の手伝いをし、ある時は売り子をする。

またある時は一緒に資料を探しに外へと出かけ、

ある時は俺の部屋で夜通しアニメを鑑賞した。

//次ページ

そうやって。

マリアンヌとの日々は、ゆるやかに過ぎていった。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//2話終了